

『不思議の国のアリス』に見られる談話標識

--- 英々辞典 (POD, LDOCE) で読み解く ---

下笠 徳次

Discourse Markers seen in *Alice's Adventures in Wonderland* --- Close Reading by the use of POD and LDOCE ---

Tokuji SHIMOGASA

0. 近年、「談話分析」あるいは「談話標識 / 談話辞」という言葉が頻用され、この方面の研究が盛んに行われてきているのが実情である。英語英米文学の分野では長年に亘って小説、劇、詩等においては本文の分析が主流であった（今でもこれは不変）。しかしながらふと気がついてみると本文中の何気ない、ちょっとした語あるいは句に意外と大切な働きがあることがしばしば判明している。いわゆる「つなぎ」の機能を果たす言語現象である。

1. 「談話分析」は文より大きな言語単位の構造パターンの研究を言い、「談話標識」の方は会話の中で同意や反論、話題の転換等のために使われる語（句）のことである。英語では discourse marker(s)¹⁾ と言い、最新の研究によると 60 以上もの例を挙げて詳述している²⁾：副詞的表現 -- actually, anyway, besides, first(ly), [last(ly)], however [nevertheless, nonetheless, still], kind [sort] of, like, now, please, then, though, whatever; 前置詞句表現 -- according to, after all, at last, at least, by the way, in fact, in other words, of course, on the other hand [on [to] the contrary]; 接続詞的表現 -- and, but [yet], plus, so; 間投詞的表現 -- ah, huh, look, oh, okay, say, uh, well, why, yes / no; 辞書的句 -- I mean, if anything, if you don't mind, if you like, mind (you), you know, you know what?, you see..

しかしながら以上がすべてというわけではない。dear me, indeed, there, come, now then, so, eh³⁾ 等も加えることができる。事実、さらに幅を広げて談話「表現」として約 650 頁に及ぶ解説を施した辞典も登場している⁴⁾。英語学習者は是非習熟して欲しい英語表現である。

談話標識は文脈を離れて眺めると中学生でも分かる易しい語（句）ばかりである。しかしながらこれらが一旦、文脈の中に紛れ込んでくるとことはそう簡単ではない。このことは口語のレベルに置いてだけでなく、文語のレベルに置いてもそうである。英語の非母語話者の立場からすると、我々日本人が外国語である英語を理解する際に、文や発話の文字通りの意味を理解するとともに、表面には現れていない、話し手の発話意図を正しく理解することが必要となってくる。しかしながらそれには非英語話者には少なからぬ困難が伴うことになる。これから代表的な例を絞って取り上げ、言及していくことにするが、それらは話し手が自分の発話意図を意識的にあるいは無意識的に相手に伝える言語的意図として機能し、実践的な意思の疎通の場においてとても

重要な位置を占めるものである。書き言葉においてもいわゆる行間を読み取る（‘read between the lines’）際に非常に大きな手がかりを提供してくれることになる。このような、話し手と書き手の発話意図を担うことになる種々様々な英語表現を学問的に「談話標識」と言う。

2. 長い英語の歴史において古典の時代から当然、これらの談話標識は継続的に使用されてきており、特に会話体の中に頻出する。これらは別の言葉で言うと「埋め草」(‘filler(s)’) で「つなぎ」の役目を果たす。言うなれば緩衝材の役割でもある。このような語句を配置することによって長くなる文章も一息つくことになり、息切れしなくなる。決して過小評価されてはならない表現の技巧と言える。上述のすべてに言及する余地はないので限られた数の談話標識に絞って、代表的なものと思われるのを取り上げ、簡略にその機能を説明していくことにする。原文に相当する邦訳は最小限程度に留めることにする。

3. 叩き台として取り上げるのに非常に相応しいと思われる文学作品が存在する。それは19世紀後半に書かれた、あの児童文学作品の白眉と言われる、ルイス・キャロル作『不思議の国のアリスの冒険』(*Alice's Adventures in Wonderland*)である。この作品は近代英語の雛形(model)あるいは原型(archetype)と言われるほど英語という言語の到達した芸術作品とも言われている。作者ルイス・キャロル(Lewis Carroll, 1832 - 98)は実名をCharles Lutwidge Dodgsonと言い、オックスフォード大学卒業後、即この大学の数学講師を務めることになる。数学教師としてはこの本名を使い、児童文学作品には筆名のLewis Carrollを、というふうに使分けられることになる。この作者が理系の人であったということにも注目して頂きたい。即ち、人文系(特に哲学)の人のように曖昧な、微妙な表現を用いることなく、文章はすべて理路整然としていて、ひとつも無駄のない英語と言われている。

最初から私たち読者が今日、目にする12章から成る作品を書き上げたわけではなく、この元になったのは『地下の国のアリスの冒険』(*Alice's Adventures Underground*)という、愛しの少女アリス一人だけに献呈する目的で(クリスマスの贈り物として)書かれたものである。この「個人的な」贈りもの(作品)が大学界隈で瞬く間に評判となり、周囲の勧めでキャロルは幾年もの歳月を費やし、元の作品のほぼ2倍の分量にして1865年に我々読者が今日、目にする作品に昇華させたのである。言葉をどれだけ磨いたかを跡付け・精査した学者⁵⁾もいるほどである。第一級の作品というものは洋の東西を問わず用意周到な準備がなされているということである。ここで取り扱う「談話標識」は細部に入るかも知れないが、名作は細部にあり、とも言う。この細部を検証することこそ精読あるいは深読み、あるいは訓詁の学の醍醐味ではなからうか。

4. この名作には印象的な談話標識が満載で万華鏡のように随所に散りばめられているが、先に列挙したものの中から取捨選択して特に問題あるいは話題となりそうなものを取り上げながらこの名作を精読いくことにする。当然のことながら面白い使い方がなされているのは会話の部分で

ある。それも主人公アリスと、この不思議の国の不思議なキャラクターたちとの丁々発止のやり取りが主たる分析の対象となるが、アリスの独り言の中にも頻出する。アリスは英語で言うとしても 'curious' な (知識欲旺盛な) 女の子であった。このことがとりもおさず、相槌 (要するに、談話標識に帰結する) の打ち方の巧さにつながってる。

5. 早速、第1章: 'Down the Rabbit-Hole' にアリスの独り言が登場する:

'I wonder if I shall fall right *through* the earth! How funny it'll seem to come out among the people that walk with their heads downwards! The Antipathies, I think ---' (she was rather glad there *was* no one listening, this time, as it didn't sound at all the right word) '--- but I shall have to ask them what the name of the country is, **you know**. Please, Ma'am, is this New Zealand or Australia?'

ここはアリスが早速ウサギの穴に落ちこちてゆく場面で、当然のことながら一人旅である。従って、上記引用では 'as you know' (「あなたも知っているように」) は使えない。ここでは「ほらね、あのね」といった類の、他者の同意を求める談話標識である。この談話標識は引き続き、本文の次の段落にも現れる:

'There are no mice in the air, I'm afraid, but you might catch a bat, and that's very like a mouse, **you know**. But do cats eat bats, I wonder?'

「空中にネズミはいないけどコウモリなら捕まえることができるわよ。ほら、ネズミにとってもよく似ているじゃない」とアリスは愛猫ダイナに話かけている場面で相手の同意を求めている。

'And what an ignorant little girl she'll think me for asking! **No**, it'll never do to ask: perhaps I shall see it written up somewhere.'

不注意に読んでいくと見落としがちなのがこの '**No**' で、立派な談話標識である。「そんなこと聞いたらなんて馬鹿な女の子だろうと思われるわ。だめだめ、聞かないことにするわ。聞いたって何の役にも立たないもん」となる。一音節の短い語ながら、前後をうまくつないでいる談話標識になっている。引き続き、同一段落に次のような、今度は作者の用いる談話標識がある:

And here Alice began to get rather sleepy, and went on saying to herself in a dreamy sort of way, 'Do cats eat bats? Do cats eat bats?' and sometimes, 'Do bats eat cats?', for, **you see**, as she couldn't answer either question, it didn't much matter which way she put it.

眠くなったアリスは頭が正常に働かず、本来なら「猫はコウモリを食べるかしら?」と言うべき個所を「コウモリは猫を食べるかしら?」と主語と目的語を入れ替えている文脈である。「ほら、あのね」といった、ポーズを取るために作者がさりげなく入れている談話標識と言えよう。

同じ段落に新しい談話標識が現れることになる:

She felt that she was dozing off, and had just begun to dream that she was walking hand in hand with Dinah, and saying to her very earnestly, 'Now, Dinah, tell me the truth: did you ever eat a bat?' when suddenly, thump! thump! down she came upon a heap of sticks and dry leaves, and the fall was over.

話題転換の個所で、「さてさて、ところで」というくらいの談話標識と言えよう。数ある副詞的表現の中にあっても重要な談話標識で、これから先この作品に随所に顔を出すことになり、邦訳すると文脈により微妙に意味が変化することになる。'now'の延長線上に'then'が付加されて'**now then**'という句もある。

アリスが地下の世界（ウサギの穴）に辿り着くとそこでの新しい冒険が始まることになる。しかし体の大きなアリスは穴から出られなくなる。そこで、

'and even if my head *would* go through,' thought poor Alice, 'it would be of very little use without my shoulders. **Oh**, how I wish I could shut up like a telescope! I think I could, if I only knew how to begin.' For, **you see**, so many out-of-the-way things had happened lately, that Alice had begun to think that very few things indeed were really impossible.

と望遠鏡のように体を畳められたらいいのに、と願う。ここに見られる談話標識'**Oh**'の使い方は適切であるように見られる。後半の'y^{ou} see'は「ほら、そうでしょう」とでも訳せよう。アリスが独り言を言うときの定番表現である。

アリスはこの不思議の国で不思議な食べ物や飲み物を口にするようになる。第1章の最後の辺りで「毒」と記されていない飲み物を口にすると、

Alice ventured to taste it, and finding it very nice (it had, **in fact**, a sort of mixed flavour of cherry tart, custard, pineapple, roast turkey, and hot buttered toast,) she very soon finished it off.

素敵な飲み物（実際には固形の食べ物！）であることが判明する。括弧の中にある'in fact'はとても重要な役目を果たす談話標識と言えよう。直前にその飲み物はとても素敵（'very nice'）とあり、それを確認するのが括弧内の説明になっている。従って「**実を言うと、実際に**」と前言を補足あるいは説明していることになる。順接の機能を果たしている。文脈によっては「**実際には**」という逆接になることもある。順接か逆接かはあくまでも文脈が決定することになる。この前置詞句表現は文脈が変わると一語の'actually'で済ませるところもある。

第1章の終わり近く、アリスはウサギの穴から出られなくなり泣きべそをかくことになる：

'**Come**, there's no use in crying like that!' said Alice to herself, rather sharply; 'I advise you to leave off this minute!'

文頭の'**Come**'こそ大事な談話標識である。「**さあさあ、さてさて、あらあら**」と邦訳できよう。「**さあさあ、そんなに泣いたってどうしようもないじゃないの!**」という下りである。この'come'

という動詞が単独で使われるときは「来る」という動作を表すことはほとんど皆無で、このような談話標識を表す機能を果たすことになる。PODでは「間投詞として命令形で用い、激励の意があり、‘now then’と同義」とある。まさしくこの文脈にピッタリである。

この章の最後でアリスの目はテーブルの下にあった小さなガラスの箱に釘付けになる：

she opened it, and found in it a very small cake, on which the words ‘EAT ME’ were beautifully marked in currants. ‘Well, I’ll eat it,’ said Alice, ‘and if it makes me grow larger, I can reach the key; and if it makes me grow smaller, I can creep under the door; so either way I’ll get into the garden, and I don’t care which happens!’

箱を開けるとその中に小さなケーキがあることに気づく。「私をお食べ」という文字が干しブドウで美しく書かれている。従ってアリスは「いいわ、じゃ、食べてみることにするわ」と即断する。納得・同意の談話標識である。何かを飲み食いするときのアリスは常に慎重を期すが、ここで食べることに即断するのはあとにちゃんと理由が書いてあるからである。

談話標識としての‘well’に関して POD は間投詞的表現として「驚き・安堵・譲歩・会話の回復・限定的な受け入れ・甘受」などを表すと定義し、それぞれに次のような具体例を呈示している：‘Well, to be true!’; ‘Well, that is over.’; ‘Well, come if you like.’; ‘Well, who was that?’; ‘Well, but it can’t be helped.’。上位ランクの COD では「より大きな驚き」を表すとあり、POD の定義にさらに1つ加えて‘expectation’の意ありとし、具体例として‘Well then’が呈示してある。LDOCE では間投詞として4つの定義をより平明にしている、4つ目に‘Oh well!’と独立させて（ ）内に使われる状況が示してある。

6. 第2章 ‘The Pool of Tears’にはアリスの驚きを表す‘Oh (oh)’が頻出し、さらにその延長線上にある‘Oh dear (oh dear)’, ‘dear, dear’などが見られる。幾つかの例を具体的な文の中で見ていくことにすると：まず自分の体が望遠鏡のようにぐんぐん大きくなっていくアリスは遙か遠く眼下に見える自分の足を見て、

‘Oh, my poor little feet, I wonder who will put on your shoes and stockings for you now, dears? I’m sure I shan’t be able! I shall be a great deal too far off to trouble myself about you...’

「ああ、あらら」とでも訳出できよう。意外にも POD では‘oh’は‘O²」を見よ、とある。「呼格名称の前に置かれたり、様々な感情を表す間投詞」とあり、単独で用いられたり、*Oh dear me!*, *O for a rest*, *Oh, what a lie!*, *Oh, is that so?* の形で用いられる、とある。単純な語に見えるがラテン語からフランス語を経て英語に入った語である。ここの文脈では「様々な感情」の中でも「悲しみ、絶望」の情と言える。LDOCE は‘oh’の項で「驚きあるいは恐怖などを表す間投詞、とある。この文脈のすぐあとに、次のような不思議な手紙の宛名書きが登場する：

Alice’s Right Foot, Esq.
Hearthrug,

near the Fender,
(with Alice's love).

Oh dear, what a nonsense I'm talking!

遠くに行ってしまった自分の両足にブーツの贈り物をするのに郵便を利用する文脈である。イギリスは郵便制度発祥の地ですすでに 19 世紀半ばには多くがこの制度を利用しており、Dodgson も学寮内の子どもたちに頻繁に手紙を書き送っていて、そのうちの多くが今日 Oxford 大学の図書館に陳列してある。なお、Dodgson (Carroll) は生涯に 10 万通以上の手紙を書いている。

自分の右足に向けて手紙を書く、ということがなんと馬鹿げているかということに気づいているアリスである。この 'oh dear' という 2 語から成る間投詞は驚きを表す代表的なもので、多くの文学作品に頻出する。POD では間投詞の項で、「驚き、悲嘆など」を表し、'dear, dear!, dear me, oh dear!' などの形で現れる、とある。まさしくこの文脈の最後がこれに該当し、驚きを表している。といっても「負」の驚きと言えよう。少なくとも嬉しい驚きではない。『アリス』物語全体を通じて 'Oh dear' は殆どの場合、「落胆・悲痛・衝撃」などを表すことになる。'dear' に関しては LDOCE の定義の方がより分かり易い。「驚き・悲しみ・小さな怒り・落胆」を表し、**OH dear!** I've lost my pen. "Mr. Smith is ill again." "**Dear me! Dear! Dear!** I'm sorry to hear that." という例が呈示してある。ここでも「負」の、つまり「悲しい驚き」を表していることが分かる。'Oh dear' はこの第 2 章のほかにも数か所現れることになる（具体例は省略）。

兎の穴から出られなくなったアリスは地上の人間から上がっておいでよと言われると；

I shall only look up and say "Who am I, then? Tell me that first, and then, if I like being that person, I'll come up : if not, I'll stay down here till I'm somebody else" --- but, **oh dear!** cried Alice, with a sudden burst of tears, 'I do wish they *would* put their heads down! I am so *very* tired of being all alone here!'

最初のうちは強がりを行っているが、最後は泣きべそをかいてしまうことになる。'oh dear!' cried Alice とある。ここでも「負」の感情の吐露である。もっとも多く頻出する単独の 'oh' も同じく「負」の文脈で出てくることになる。

この章をしばらく行くと次のような段落に出くわすことになる：

Alice took up the fan and gloves, and, as the hall was very hot, she kept fanning herself all the time she went on talking: '**Dear, dear!** How queer everything is to-day. And yesterday things went on just as usual.

例のシロウサギが落っことしていった扇の手袋を拾い上げたアリスは（大広間がとても暑かったので）その扇を使って扇ぎながら独り言を言う：「おやおや、ほんとにもう、あーあ、今日という日は何もかもおかしいわ。昨日は物事はいつものように進んでいたのに」と。ここでも落胆・悲痛の感情の吐露になっていることが分かる。'dear' を重ねることによってその落胆の度合いが

少し強まっているように思われる。

さてこの第2章で1回だけ‘Ah’が登場する文脈がある：

I almost think I can remember feeling a little different. But if I'm not the same, the next question is, Who in the world am I? **Ah**, *that's* the great puzzle! And she began thinking over all the children she knew that were of the same age of herself, to see if she could have been changed for any of them.

「もし自分が違っていたら、次なる問題は「ならば私は一体全体何者なのよ？あーあ、これって大問題だわ！」とある。いわゆるアイデンティティが分からなくなったアリスの姿で、ここに見られる‘Ah’は絶望の感情となる。PODでは‘oh’よりもむしろ‘ah’に重きを置いているように思われる。「喜び・悲しみ・驚き・退屈・称賛・軽蔑・懇願・忠告など」を表す間投詞、とある。LDOCEでは「驚き・憐憫・苦痛・喜び・嫌悪など」を表すとあり、Ah! I hurt my foot on that stone. Ah, there you are! の例文が見られる。前者は苦痛を表し、後者は不意の驚きを表していると思われる。‘oh’にしても‘ah’にしても単語以下とも言えるかも知れないが、発話の中では大変重要な役割を果たしている談話標識と言えよう。行間を深く読み込まないと非英語圏の読者には咄嗟には適訳が見つからないかも知れない。たかが‘oh’、‘ah’されど‘oh’、‘ah’である。

7. 第3章‘A Caucus-Race and a Long Tale’には数は多くないが注目すべき談話標識が見られる。それは‘Why’である：

‘**Why**,’ said the Dodo, ‘the best way to explain it is to do it.’ (And, as you might like to try the thing yourself, some winter day, I will tell you how the Dodo managed it.)

コーカス・レースとはどんなものなんですか、というアリスの質問に対するドードー鳥の答えである。「**なあに**、説明する最善の方法はそれを実際にやってみることさ」と、究極の答弁をしている。この‘why’がいかに重要な談話標識であるかをPODが立証している：1)「発見」(why, it is Jones! 2)「じれったさ」(why, of course I do.) 3)「熟慮・内省・意見」(why, yes, I think so.) 4)「反対・異議」(why, what is the harm?) 5)「結論」(if or since silver will not do, why, we must try gold.) 等。「等」とあるのでほかにも文脈によっては6つ目、7つ目、8つ目の解釈もあり得る。この文脈ではずばり、5)の「結論」ということが分かる。

同様の文脈が引き続き現れることになる：

‘But who is to give the prizes?’ quite a chorus of voices asked.

‘**Why**, she, of course,’ said the Dodo, pointing to Alice with one finger; and the whole party at once crowded round her, calling out in a confused way, ‘Prizes! Prizes!’

「じゃ、誰が賞品をあげることになるの？」と皆が一斉に質問することになる。「**なあに**、あの娘っ子さ、もちろんね」とドードーは人差し指でアリスを指差すことになる。すると皆は一斉にアリスの周囲に集まり、「賞品頂戴、賞品頂戴！」とわいわいがやがや言い出す始末。この文脈で

もまさしく「結論」を表す談話標識となっていることが分かる。COD も類似の語釈をして、それぞれに具体例を呈示している。この点、POD と COD は好勝負と言える。ところが LDOCE はただ単に「驚き」を表し、'*I'm looking for my glasses; why, I was wearing them all the time!*' という具体例を呈示している。Oxford 系の辞書の優位が窺われる。なお、ここの文脈に見られる 'of course' は前置詞句表現としての談話標識となっている。他にも時系列を表す副詞的語句 'first', 'then' や「対比・対照」を表す接続副詞としての談話標識も現れる。

この章の後半部に次のような下りがある：

'You promised to tell me your history, **you know**,' said Alice, 'and why it is you hate -- C and D,' she added in a whisper, half afraid that it would be offended again.

'Mine is a long and a sad tale!' said the Mouse, turning to Alice, and sighing.

賢いアリスが前章における約束を覚えていて、相手（ネズミ）にその約束の履行を迫る場面である。「ほら（/だって）、お話をしてくださるって約束だったでしょ」と。ここにおける 'you know' は「あのう、そのう、つまり、ずばり言う」とも訳出できる。直前あるいは以前の語句の明確化となっている。ここでは 'as you know' と微妙にオーバーラップしている部分もある。

8. 第4章：'The Rabbit Sends in a Little Bill' にはこれといった注目に値する談話標識はなさそうである。アリスの驚きを表す談話標識 'oh' は5回現れる：

'But then,' thought Alice, 'shall I *never* get any older than I am now? That'll be a comfort, one way -- never to be an old woman -- but then -- always to have lessons to learn! **Oh**, I shouldn't like *that*!' '**Oh**, you foolish Alice!' she answered herself. **Oh!** They'll do well enough; don't be particular -- Here, Bill! catch hold of this rope-- Will the roof bear -- Mind the loose slate -- **Oh**, it's coming down! '**Oh!** So Bill's got to come down the chimney, has he?' said Alice to herself.

文脈の詳述は省くが、いずれもアリスのちょっとした驚き・自己確認などの心のうちを表す談話標識となっている。最初の引用例中にある2つの 'but then'（「じゃ、それならば」）は話題の展開を表す談話標識の働きをしている。

この章で注目に値する談話標識は次の文の中に現れる。上記の3番目の地の文にすぐ続いて：

Heads below!' (a loud crash) --**Now**, who did that? -- It was Bill, I fancy -- Who's to go down the chimney? Nay, *I shan't!* You do it! -- *That* I won't, then! -- Bill's got to go down the chimney!

一家の主人と使用人たちとのやり取りの場面で、家の中に閉じ込められた主人が使用人たちに梯子を持って来い、云々と活気に満ちた会話である：「頭を下げろ（大きな物音がする）。さてさて、瓦を落としたのはどいつじゃ？ それはビルだと思うけど。どいつが煙突を降りて行くのだ？ いや、俺様はいやだね。お前が行けよ！そんなこと俺はやりたくねえよ！ならばビルに行ってもらうしか方法ねえな」という、短い、小気味よい庶民の英語の響きがしているように思われる。

すべてがアングロ・サクソン系の短い語から成り立っている。COD も POD も間投詞としての項目は設けていないが、明らかに話題転換の談話標識である。POD に「(時の観念はなく、文章に様々な音調を与えて) pray, surely, I warn you, you must know, etc.」という説明の箇所があり、ここに適用可能である。一家の主人が使用人に注意・警告を与えているところなので。

9. 第5章: 'Advice from a Caterpillar' には 'Well' 4 回、'Come'、'Oh'、'you know' が各 2 回、'you see' 1 回が現れ、注目すべきは 'you see' と 'you know' の使われ方であろう。談話標識なのか文字通りの意味なのかを見分ける最も劇的な場面に早速、読者は遭遇することになる。

'What do you mean by that?' said the Caterpillar sternly. 'Explain yourself!'

'I can't explain myself, I'm afraid, sir,' said Alice, 'because I'm not myself, **you see.**'

'I don't see,' said the Caterpillar.

アリスは作品の中では何かを食べたり飲んだりすると体に変化が生ずる。従って、自分が自分でないような気がする、という下りである。そこで芋虫が「それはどういう意味かね? はっきり説明してもらいたいね」と厳しい口調で言う。するとアリスは「済みませんが、わたし、自分自身を説明できないんです。だって、今は (いつもの) 自分自身ではないのですから、ほらね」「あんたの言っていることが分からないな」と芋虫が返す。

アリスの言う 'you see' こそまさしく「ほらね」という相手の同意を引き出す談話標識である。ところが芋虫はこの、アリスの言う 'you see' を「あなたは理解していらっしゃると思うが」というふうに文字通りにとっている。もちろんアリスを茶化しているのである。アリスが「自分が (いま) 自分自身でないのは 1 日の間にこんなにも度々、サイズが変化するものですから」と理由を直後に付け加えている。'you see' を COD は「挿入句として用い、確かにあなたもご存じのように」と語釈している。とすると 'as you see' と同義になってしまい、境界線が曖昧となる。POD は「あなたに知って頂きたいのですが」と付加している。この 2 つの辞典ができた時代は今のような談話標識という概念はなかったかも知れない。LDOCE は「(くだけた表現として) 本来の意味を弱めて使われると語釈し "Why are you so late?" "Well, you see, the bus broke down." I've got to stay with my mother, you see, so I can't come along. という例を示している。

上記と同じような下りがもう少しあとに現れることになる:

The Caterpillar was the first to speak. 'What size do you want to be?' it asked.

'Oh, I'm not particular as to size,' Alice hastily replied, 'only one doesn't like changing so often, **you know.**' '**I don't know,**' said the Caterpillar. Alice said nothing; she had never been so much contradicted in all her life before, and she felt that she was losing her temper.

動詞が 'see' から 'know' に変わっただけのことなので改めて説明の要もないが、'see' の場合と同じく 'know' の項でも POD, COD のいずれにも談話標識としての使用に関しては言及はない。LDOCE は「陳述に力を添えるために使われる」とあり、You'll have to try harder, you know, if you want to succeed. という具体例を呈示している。文中で挿入句的に用いられ、「ええと、ほら」

の意で、直前に述べた表現を分かり易く説明したり、これから述べようとすることに対する聞き手の理解・同意・共感を期待したりする前置きの役目を果たしている。

以上の 'I see' と 'I know' は辞書的句 (lexical phrase) のレベルでは最も頻度の高い談話標識である。『鏡の国のアリス』にはこの2つの談話標識が一段と多く用いられている。言語学的にはこの後者の作品の方がさらに精巧に入り込んでいる。

次に 'well' を含む文脈が4例ある：

'Well, perhaps your feelings may be different,' said Alice; 'all I know is, it would feel very queer to *me*.' 'You' said the Caterpillar contemptuously. 'Who are *you*?' 'Well, I've tried to say "*How doth the little busy bee,*" but it all came different!' Alice replied in a very melancholy voice. 'Well, I should like to be a little larger, sir, if you wouldn't mind,' said Alice: 'three inches is such a wretched height to be.' 'Well, be off, then!' said the Pigeon in a sulky tone, as it settled down again into its nest.

文脈の説明は省略するが夫々の意味は「ええと」「ええと」「そうですね」「ならば」と最大公約数的な訳が割り当てられるであろう。副詞ではあるが間投詞的表現の代表的な談話標識で、主に文頭で用いられる。同意や反論、驚き、譲歩、安堵、催促などの話し手の心的態度を表している。文末に生起することも少なくない。言語使用域としてはくだけた話し言葉で用いられる。

この章に談話標識としての 'Come' が2回現れる：

'Come, my head's free at last!' said Alice in a tone of delight, which changed into alarm in another moment, when she found that her shoulders were nowhere to be found: all she could see, when she looked down, was an immense length of neck, which seemed to rise like a stalk out of a sea of green leaves that lay far below her.

「やれやれ、やっと頭が動くようになったわ！」とアリスはとても嬉しくなって言うが、次の瞬間には驚きの声になる。それというのも自分の両の肩がどこにも見えなくなったからである。.... という文脈で、'Come' には「安堵」感が含意されていることが分かる。

'Come, there's half my plan done now! How puzzling all these changes are! I'm never sure what I'm going to be, from one minute to another! **However**, I've got back to my right size: the next thing is, to get into that beautiful garden --- how *is* that to be done, I wonder?'

「さてと、今や私の計画は半分が完了したことになるわ！こんなにしばしば体に変化が生じると全く頭が混乱してしまうわ！一分また一分と、これから自分がどうなるのか全く分からないわ。しかしながら、なんとかして元の体の大きさに戻らなくちゃ。次なる問題はあの美しい庭に行くことだわ。でもどうやったらそれができるのかしら？」。ここでは話題の転換の役割を果たしている。'However' も副詞的表現の談話標識として機能している。

'come' を POD は「間投詞的表現として命令法で用い、激励の気持ちを込めて 'now then' と同義とし、'think again' の意もあり、としている。COD も同様の定義であるが、'don't be hasty' の

意もあり、と付言している。LDOCE には談話標識としての記述は見られない。平均的な専門書にもこの 'come' を談話標識語彙としては記述していないようである。不思議な感がある。

10. 第6章：'Pig and Pepper'に見られる談話標識で最も頻出するのは 'oh' で、アリスを初め、この不思議の国の住人たちの大小の驚きを見てとることができる。ほかに 'Come' も1例見られるが、初出は 'in fact' と 'Mind now!'、そして 'Well, then'、'By-the-bye' である。前置詞句表現としての談話標識 'in fact' はしばしば話題となる頻出句である。

この章に次のような下りがある：

No, there were no tears. 'If you're going to turn into a pig, my dear,' said Alice, seriously, 'I'll have nothing more to do with you. **Mind now!** The poor little thing sobbed again (...).

例のブタ赤ちゃんとのアリスの会話である。「もしあなたがブタになったら、これ以上面倒は見えないからね。いいわね！」とアリスは真剣です。通例 'mind you' という形で用いられるが、'you' の省略も少なくない。この表現は元は「これから言うことを心に銘記しておきなさい、注意しなさい」という命令法だったが、今日ではこの命令的な意味合いは薄れ、専ら聞き手の注意を喚起する談話標識として機能している。上記の例が該当する。さらに 'now' の追加により効果は増している。聞き手との心理的な距離を詰めようとする話し手の親愛の情を表している。POD では 'mind you' を「譲歩あるいは但し書きの意で挿入句的に用いられる」とある。LDOCE は 'mind (you)' を「この事実を考慮に入れる」と定義し、"*Roger has been very bad-tempered this week*" "*Yes, but mind you, he's been rather ill just recently.*" という文を例示している。ここで留意しておきたいのは、文尾に置かれるときは話し手あるいは聞き手にとって明白に思われる内容に後続して、そのあとにしばしば話し手の主張点を表す but 節を導く合図として用いられることになる。

この章のほとんど最後の辺り、アリスとチェシャー猫の会話で、有名な次章 ('A Mad Tea-Party') への橋渡しの役割を果たす下りがある。例の「気違い論争」の場面が続くことになる：

Alice didn't think that proved it at all; however, she went on 'And how do you know that you're mad?' 'To begin with,' said the Cat, a dog's not mad. You grant that?'

'I suppose so,' said Alice. '**Well, then,**' the Cat went on, '**you see,** a dog growls when it's angry, and wags its tail when it's pleased. **Now** I growl when I am pleased, and wag my tail when I'm angry. Therefore, I'm mad.' 'I call it purring, not growling,' said Alice.

「よかろう、それならばじゃ」「いいか、ほら、犬は怒っているとき唸り、嬉しいときは尾っぽを振るね。さて、このわしは嬉しいときは唸り、怒っているときは尾っぽを振るのだぞ。それ故に俺様は気違いというわけさ」とチェシャー猫。

「それって唸るのではなくって、喉をごろごろ鳴らすっていうのではありませんか」とアリスは正論を吐く。ここに見られる 'Well, then' は2つの談話標識が共起していることになり効果的と

言えよう。さらに相手に同意を求める 'you see' も見られる。'Now' は直後に句読点はないが、「さて (と)」という、ちょっとした話題転換を表す談話標識として機能していることが分かる。

11. さて、この作品では愁眉の章と言われる第7章：'A Mad Tea-Party'における談話標識を見てゆくことにする。'Come', 'at least', 'you know', 'of course', 'I dare say', 'Ah', 'Now', '(but) then', 'Well', 'eh', 'at last', 'Really', 'at any rate', 'at last'などが生起する。最頻出の談話標識は 'you know' で8回を数える。

それでは印象的と思われる個所を読んでいくことにする。アリスは帽子屋に髪を短く切り給えと言われると「個人攻撃はご法度よ」と切り返す。すると帽子屋は目をぱちりと開け、「ワタリガラスはなぜ書き物机に似ているか？」と謎解きを仕掛ける。するとアリスは、

'Come, we shall have some fun now!' thought Alice. 'I'm glad they've begun asking riddles. --- I believe I can guess that,' she added aloud.

「さてと、いよいよ面白くなってきたわ。連中が謎解きを始めてくれて嬉しいわ。きっと答えが推量できると思うわ」。ここにおける 'Come' は命令法ではあるが間投詞的用法で POD は 'now then (in encouragement)' と簡潔に言い換えている。アリスの自信のほどが窺える。

このすぐあとにあの有名な 'I mean what I say' 対 'I say what I mean' 論争 (?) が見られる。アリスはこの言葉遊びに巻き込まれることになる：

'Then you should say what you mean,' the March Hare went on. 'I do,' Alice hastily replied; 'at least --- at least I mean what I say --- that's the same thing, you know.'

「じゃ、本当のことを言うべきだね」と三月ウサギが続けます。「そうしますわよ。少なくとも --- 少なくともわたしの言っていることは本当よ。これって同じことになるのでは、そうでしょ」。'at least' は元来、数量を表す語句を修飾し、「少なくとも、最低限に見積もっても」の意であるが、その延長線上に「少なくとも.... である」の意で、最低限分かっている客観的事実や可能性のある事態を表す。「ともかく、いずれにしても」がここでは適訳かも。様々な問題、不利な点、否定的見解や感情、悪い状況がある一方で最低限のよい状況やプラスの見解があるという意味合いで、好ましい状況について言及するときに用いられる談話標識である。特に言語表現そのものについて言及し、「もっと正確に言えば、つまり」の意で前言を訂正したり、言い換えたりする場合に用いられる。ここがその好例である。この段落の最後にまた 'you know' が見られ、相手の同意を求めている。

話がさらに進むと 'I dare say' が2回見られ、これは 'you know', 'you see' と同じ範疇、つまり辞書的句に属する談話標識である。「時間」(擬人化されている) に話しかける云々の下りがあり、

'If you knew Time as well as I do,' said the Hatter, 'you wouldn't talk about wasting *it*. It's *him*.' 'I don't know what you mean,' said Alice. 'Of course you don't!' the Hatter said, tossing his head contemptuously. 'I dare say you never even spoke to Time!'

「もしあんたが俺様同様、時間様のことを知っておれば、時間を無駄使いするなんて言えないはずだよ。時間様は人なんだからな。」「私、あなたの言っている真意が分からないわ」とアリス。「もちろん、あんたには分かりっこないだろうよ。おそらくあんたは時間様に話しかけたことさえないだろうよ」。頻出する談話標識 'of course' については言及しない。後者の 'I dare say' は主にイギリス英語では文頭で使われ（ときに文末にも現れる）、'I suppose' と同義となる。アメリカ英語ではやや古風となる。あとに節が続く場合でも接続詞 'that' は省略される傾向にある。もう一か所現れる 'I dare say' も同様な文脈となる：

The Dormouse sulkily remarked, 'If you can't be civil, you'd better finish the story for yourself.' 'No, please go on!' Alice said very humbly; 'I won't interrupt again. **I dare say** there may be *one*.'

ヤマネがアリスに「お前さん、礼儀正しくしないと、話の残りはあんた自身にやってもらおうよ」と胡散臭そうに言う。するとアリスは「いいえ、どうか続けて下さい！二度と話の邪魔はしませんから。おそらくそういうものがあるかも知れませんわね」ととても謙虚になって言う。'I dare say' を POD は 'be prepared to believe, do not deny' と語釈している。一応、相手の言ったことを認めて、否定はしない、とある。要するに消極的な賛同となる。なお、'one' とは糖蜜の井戸 ('treacle well') のことである。現実にはそういうものはないので、アリスの言う 'I dare say there may be *one*.' は正論かも知れない。

間投詞 'Ah' と 'eh' それぞれ 1 回ずつ現れるが、印象的な文脈なので触れる：

先ほどの「時間に話しかけたことはないだろう」云々に続く個所で、

'Perhaps not,' Alice cautiously replied: 'but I know I have to beat time when I learn music.'

'**Ah!** that accounts for it,' said the Hatter. 'He won't stand beating. **Now**, if you only kept on good terms with him, he'd do almost anything you liked with the clock.'

「おそらくないと思うわ。でも音楽を習うときは拍子をとって、叩くことはあるけど」とアリスは慎重に答える。「あっ、それで分かった。「時間様は叩かれるのが我慢ならぬんだ。さてと、あんたがもし時間様と仲良くしたければ、時間様はあんたの好きなことはほとんど何でもしてくれるよ」と帽子屋が言う。'Ah' には POD によると 'joy, sorrow, surprise, boredom, admiration, contempt, entreaty, remonstrance, etc.' と 8 つの感情を表すとあるが、ここではある情報を受け止めた応答の合図となっていて、その情報が話し手の予測と一致して喜びや満足を感じており、さらに真面目さを含意している。一方、'oh' の方は受け止めた情報が話し手の予測と一致していないので、驚きを表すことが多く、よりくだけた感じがする。後半に生起する 'Now' はちょっとした話題転換を意味する談話標識となっていて、POD では意外にも談話標識を意味する明確な記述が見られないが、「(時間の観念を伴わず、文章に種々様々な音調を与えて) pray, surely, I warn you, you must know, etc. の意がある」とある。ここでは 'I warn you', もしくは 'you must know' の含意がある。LDOCE では「注意を惹きつけるために、あるいは警告や命令を表すため

に意味が弱められて用いられる」とあるので、PODにおける ‘I warn you’, ‘you must know’ に相当する。尚、この働きをする ‘Now’ は往々にして ‘There now’, ‘Now then’ 更には ‘Now, now’ と繰り返して使われる傾向にある。

糖蜜を汲む云々の下りで次のような段落が見られる：

‘But I don’t know understand. Where did they draw the treacle from?’

‘You can draw water out of a water-well,’ said the Hatter; ‘so I should think you could draw treacle out of a treacle-well --- **eh**, stupid?’ ‘But they were *in* the well,’ Alice said to the Dormouse, not choosing to notice this last remark. ‘**Of course** they were,’ said the Dormouse; ‘--- well in.’ This answer so confused poor Alice, that she let the Dormouse go on for some time without interrupting it.

「でも私には分かりませんわ。彼女達はどこから糖蜜を汲んでいたのですか？」「いいかね、水ならば水の井戸から水を汲み上げるよね。ならばじゃ、糖蜜は糖蜜の井戸から汲み上げられるではないか。ねえ、どうだ、どう？阿保と違うか、お前さんは」と帽子屋は言う。

「でも彼女達はすでに井戸の中に居たのでしょ」とアリスはヤマネに言う、お前さん、阿呆と違うかという言葉には気も留めずに。「もちろん、そうだったよ。それもいと深くにね」。この答えに可哀そうにアリスは戸惑ってしまい、しばらくは邪魔をすることなくヤマネに喋らせることになる。ここに見られる談話標識 ‘eh’ はいかにも相手を小馬鹿にしている感じがはっきりと見てとれる。‘ah’ もしくは ‘oh’ の北方方言形で、POD によると ‘inquiry, surprise, assent’ を表すとあるが、ここでは返答あるいは同意を促して確認をとっていることになる。LDOCE は「驚きや疑念を表すために、あるいは誰かに同意を求めるとき、または何かを繰り返してもらうとき使われる」と語釈し、‘Let’s have another drink, eh?’ / “I’m cold!” “Eh?” “I said I’M cold!” という適切な用例の呈示がなされている。

この章も最後の辺りになってヤマネが難題をふっかける下りがある。‘m’ で始まるものを絵に描いたものを、たとえば ‘much of a muchness’ の ‘muchness’ を描いた絵を見たことがあるか？と。するとアリスは：

‘**Really, now** you ask me,’ said Alice, very much confused, I don’t think ---’

‘**Then** you shouldn’t talk,’ said the Hatter.

「ほんとにもう、なんという質問をなさるのですか。考えてみたこともありませんわ」とアリスはとても頭が混乱する始末。ここにおける ‘really’ は POD では ‘indeed, I assure you’ が当てはまるかも知れない。感情・反応を表す間投詞的機能を果たし、興味・驚き・疑念をしばしば表すが、ここでは「驚き」が含意されている。現実の会話において幅広く用いられ、文脈によりその含む意味合いは多岐に亘る。文頭に生起する ‘now’ の機能は後ろにコンマがないので意見が分かれるところであるが、さてさてというくらしいの軽い談話標識と捉えていい。ほとんどの訳書にはこの語の訳語が見られないところを見ると、やはり一種の談話標識とみなす方が妥当であろう。

この章に見られる談話標識としての 'Now' や 'Then' は他の個所にも生起し、どの文脈においてもほぼ同義、と確認できる。この章の最後の場面に注目するとしよう：

Then she set to work nibbling at the mushroom (she had kept a piece of it in her pocket) till she was about a foot high: **then** she walked down the little passage: and **then** --- she found herself **at last** in the beautiful garden, among the bright flower-beds and the cool fountains.

そこでキノコをかじり始め（アリスはまだポケットの中にひとかけら持っていたのです）、1フィートの背丈になりました。次にドアの向こうの小さな通路を通して向こうの方へ歩いて行きます。すると、気がついてみるとついに自分があの美しい庭に出ているのが分かります。そこにはきれいな花壇と涼しそうにみえる噴水があります。

3つの 'then' のうち、最初の2つは時間の流れを示す副詞で談話標識としては、通例文頭で用いられ、「それから、次に、そのあとで」に意で順序を表す。三番目の 'then' は少し用法が異なるように思われる。'and' と共起し、「すると」という意味になり、時の流れの最終結論を表すことになる。話の流れの最終の合図となっている。

談話標識としての副詞句 'at last' を POD は 'after much delay, in the end' と言い換えている。この句は 'at long last' が短縮された形で、「(長い間待ったり、いろいろ努力しながら望んでいたことが) ついに、とうとう、やっと (のことで)」の意で、常に話し手の気持ちを表すことから、談話標識としての機能を持つことになる。成立しそうでなかなか成立しなかった行為や状態が一定の時間的範囲のなかで成立したことを述べるだけでなく、話し手の待ち望む気持ち、あることが何とかして実現して欲しいと切望する気持ちも示す表現となっている。「ついに」とは「やれやれ、やっとのことで、ようやく」という最終的な訳語に落ち着くのが好ましかろう。

類義の 'lastly' は必ずしも談話標識としての機能は果たさないように思われる。POD は (数を数える際に)「最後に」と言う意味で 'finally, in the last place' と定義しており、LDOCE は「その他すべてのあとで、最後に」と定義し、'Lastly, let me mention the great support I've had from my wife.' という例文を呈示している。

12. 第8章：'The Queen's Croquet-Ground' には 'you see' が最多で4回現れ、ほかに 'you know', after all, at least, Why, oh, Yes, それに話の流れを時系列に表す first, next, then, last などが見られる。

カードとしての登場人物 Two (二郎), Five (五郎), Seven (七郎) のやり取りで次のような下りがある (二郎、五郎、七郎は擬人化されているので仮にこのように呼ぶことにする)：

'You'd better not talk!' said Five. 'I heard the Queen say only yesterday you deserved to be beheaded!' 'What for?' said the one who had spoken first. 'That's none of *your* business, Two!' said Seven. 'Yes, it *is* his business!' said Five, 'and I'll tell him --

「お前は話さないほうがいいぜ！」と五郎。「つい昨日のこと、女王様がお前は首、と仰ったのを聞いたぜ！」「何でだ？」と最初に口を聞いた男が言う。「お前さんには関係ねえだろ、二郎！」

と七郎が言う。「いや、関係があるさ！」と五郎が言う。

英語における‘yes’と‘no’の使い分けは非英語話者にとってはときに難しいことがあるが、ここがその一例である。‘Yes’に先行する文章の中に否定語（ここでは‘none’）があると、「はい」ではなく、「いいえ」となることに注意しなければならない。PODでは‘acceptance of statement’とあり、LDOCEでは‘agreement or willingness’を表すとあるが、これは先行する文が肯定の場合であって、否定文の場合は‘unacceptance, disagreement, unwillingness’を表すと結論できる。

さて、この章はこの3人が庭に植えてある白いバラに赤のペンキを塗っている場面から始まる。アリスが‘Would you tell me,’ said Alice, a little timidly ‘why you are painting those roses?’ とおずおずと尋ねると、五郎と七郎は無言でお互いを見合わせることになり、二郎が低い声で次のように始める：

‘Why the fact is, **you see**, Miss, this here ought to have been a *red* rose-tree, and we put a white one in by mistake; and if the Queen was to find it out, we should all have our heads cut off, **you know**. So *you see*, Miss, we’re doing our best, afore she comes to --’

「あのね、ほら、お嬢さん、ここには本来、赤い薔薇の木があって然るべきであったが、われらは誤って白いのを植えたってわけさ。だからもし女王陛下に見つかってしまったら、みんな首が飛ぶってわけさ、ほらね。だから、お嬢さん、われらは女王陛下がお越しになる前に一生懸命になって……」文頭の‘Why’も -- 直後にコンマはないが -- 談話標識となっている。見落とし勝ちである。この文脈では2つの談話標識‘you see’と‘you mean’はほぼ同じ働きをしているものと理解できる。2回目の‘you see’は文字通り、「あなたは分かっている」となる。

時系列を表す談話標識‘first’, ‘next’, ‘then’, ‘last’はカードの形をした一団が登場する場面に現れ（原文省略）、「まず」(‘first’) 棍棒を持った10人の兵隊たち、「それから」(‘next’) 10人の廷臣たち、そのあとに王家の子どもたち、「次に」(‘next’) お客たち、大抵は王様と女王様であったが…、「そのあとから」(‘then’) ハートのジャックが、そして「最後に」(‘last’) に登場するのがハートの王様と女王様。階級社会における人々の儀式そのものの順序となっている。

この壮大な行列がアリスの存在に目が留まると、女王様はアリスに、

‘What’s your name, child?’ と尋ねられます。するとアリスは、

‘My name is Alice, so please your Majesty,’ said Alice very politely, but she added, to herself, ‘**Why**, they’re only a pack of cards, **after all**. I needn’t be afraid of them!’

「名前はアリスですけど、女王陛下」と非常に丁寧に答えるが、自分に向かって「**なあに、結局のところ**、連中はたかが一組のカードじゃない。怖がることなんかないわ！」と付け加える。ここに見られる‘Why’は明らかにアリスの‘discovery’ (POD) を、つまり、相手は恐れるに足らずということが分かった、という発見を表している。‘after all’をPODは‘after’の項で‘in spite of what has been or done or expected’と、長たらしく語釈しているが、LDOCEは‘after all’を独立見出しとして‘in spite of everything’と簡潔に言い換えている。通例、文末で用いられ、事

の成り行きでいろいろなことが生じたが、とどのつまりとして「結局は、結果的に」の意に落ち着く。但し、ただ単に出来事の順番を表すのではなくて当初の期待・予測・計画に反した結果が生じたこと、または出来事のある段階で予想外の出来事が生じたことを暗示することもある。さらに「時」の概念が次第に薄れてゆき、それまでの記述をまとめる機能が生じ、談話標識としてさらに発展していくことになる。

‘Oh’ と ‘you see’ が現れる文脈を見てみることにする：

‘She boxed the Queen’s ears ---’ the Rabbit began. Alice gave a little scream of laughter. ‘Oh, hush!’ the Rabbit whispered in a frightened tone. ‘The Queen will hear you! **You see**, she came rather late, and the Queen said ---’

「女王様の両耳をひっぱ叩いたのですよ --」とシロウサギが始める。するとアリスはゲラゲラ笑い出す始末。「しっ、静かに！」とシロウサギは怯えた口調で囁く。「女王様に聞こえてしまうではないか！ほら、侯爵夫人はかなり遅れてこられたので、女王様が仰るには --」。ここに見られる ‘oh’ は「驚き」あるいは「依頼」を表している。アリスが突然大声で笑い出しているので驚き、そして女王様に聞こえてしまうので笑わないで、と頼んでいるのが分かる。‘You see’ は相手の同意を求めている。POD では ‘as you no doubt know’ あるいは ‘I wish you to know’ と語釈している。

この章の最後は ‘at least’ について言及することにする。女王様の主催するクローケーのゲームがめっちゃくちゃであることに関する下りである：

‘I don’t think they play at all fairly,’ Alice began, in rather a complaining tone, ‘and they all quarrel so dreadfully one can’t hear oneself speak --- and they don’t seem to have any rules in particular; **at least**, if there are, nobody attends to them --- and you’ve no idea how confusing it is all the things being alive; ---

全訳を付すことは避けるが、要するに「**少なくとも**」誰一人として規則なんか意を払う人は一人もいない、と言っている。基本的には数量を表す語句を修飾するが、ここでは発展的に状況や行動に関して用いられており「**少なくとも....**である」の意である。最低限判明している客観的事実や可能性のある事態をも表す。「**ともかく、いずれにしても**」の意と受け取ってもいい。

13. 第9章：‘The Mock Turtle’s Story’ には ‘of course’、‘well’ 4 回、‘oh’ 3 回、‘ah’、‘then’、‘yes’ がそれぞれ 2 回、そして ‘Now’、‘Come’、‘Why’、‘though’、‘at last’、‘you know’ などが見られる。これまでの全8章の中に見られる用法と大同小異の談話標識がほとんどであるが、文脈によっては興味深い個所があるので見ていくことにする。

いきなり最初の ‘you know’ が問題になりそうである：

‘... I only wish people know *that*: then they wouldn’t be so stingy about it, **you know** ---’ She had quite forgotten the Duchess by this time, and was a little startled when she heard her voice close to her ear.

子どもの性格を決めるのは食べ物のせいであって、優しい性格を決定するのは「甘いもの」となるので、大人たちは甘いものを与えるのにけちけちしないで欲しい、という文脈になっている。最後の ‘you know’ が談話標識なのか、あるいはその直後に文章が続く予定であったのかは不明となっているが、「ほら、そうでしょう」と解してもよさそうである。

話の流れに沿って逐次取り上げることにする。
公爵夫人はとにかく「ものごとには教訓がある」が口癖となっている：

‘’Tis so,’ said the Duchess: ‘and the moral of that is --- “Oh, ’tis love, ’tis love, that makes the world go round!”’ ‘Somebody said,’ Alice whispered, ‘that it’s done by everybody minding their own business!’ ‘**Ah, well!** It means much the same thing,’ said the Duchess,

後半部分は「誰かが言っていたわ、皆が自分のことだけにかまっていれば世界はうまく動くって」とアリスが囁く。「ああ、それはそうだね、大体似たようなものだがね」と公爵夫人。ここでは2つの談話標識は相手（アリス）に同意している機能を担っていることになる。‘Oh, well’ という連続生起の例は見られないように思われる。

公爵夫人は女王陛下の前では借りてきた猫同然である：

‘A fine day, your Majesty!’ the Duchess began in a low, weak voice.

‘**Now**, I give you fair warning,’ shouted the Queen, stamping on the ground as she spoke; ‘either you or your head must be off, and that in about half no time! Take your choice!’

「よいお天気ですこと、女王陛下！」と低い、弱い声で始める。「さてと、とくと警告しておくぞ！」と女王陛下。最初の天気の話はお世辞となっている。ここにおける ‘Now’ は相手への警告で、POD では ‘as preface to indignant remark’ とある。女王様が怒っていられるのが分かる。

海岸の岩棚の上で休んでいるグリフォンは女王様の姿が見えなくなると、‘What fun!’ said the Gryphon, half to itself, half to Alice. と言う。すると、

‘What *is* the fun?’ said Alice. ‘**Why**, *she*,’ said Gryphon. ‘It’s all her fancy, that: they never executes nobody, **you know**. Come on!’

「一体全体、何がそんなに面白いの?」「**なあに**、あのかたのことがだよ。あれは全部あのかたの空想に過ぎないんだよ。ほら、誰一人として殺すことはしないんだよ」とグリフォンが言います。ここに見られる ‘Why’ は POD の説明でいくと ‘discovery’ あるいは ‘conclusion’ と言えよう。女王様はことあるごとに他者を死刑に処す、と言っているが、結果的には誰一人としてそうはしていないことが「分かっている」、「結論」を下すことになります。あとの ‘you know’ はアリスに同意を求める談話標識となっている。

この章の後半部分はいわゆる海の学校が話題となっていて、学校で教える教科が問題となる、有名な下りが続く：

‘With extras?’ asked the Mock Turtle a little anxiously. ‘**Yes,**’ said Alice, ‘we learned French and music.’ ‘And washing?’ said the Mock Turtle. ‘Certainly not!’ said Alice indignantly. ‘**Ah!** **then** yours wasn’t a really good school,’ said the Mock Turtle in a tone of great relief.

「課外科目もあったの？」とまがいウミガメが少し気になって言う。「はい、私たちはフランス語と音楽を習いましたわ」「洗濯は？」とまがいウミガメ。「そんなのはなかったわ！」とアリスは怒ってしまう。「あ、そう、ならば、あんたの通っていた学校はたいした学校ではなかったのだな」。**‘Yes’**は相手の言ったことを受け入れる（‘acceptance of statement’）談話標識となっている。**‘Ah’**はここでは「軽蔑」(PODにおける‘contempt’)を表し、次の‘then’は‘under those circumstances, on that condition, if that is so’ (POD)の意となり、「それならば」という談話標識となっている。

世にも珍しい言葉 ‘Uglification’ が登場する下りを見ていくことにする：

‘I never heard of “Uglification,”’ Alice ventured to say. What is it?’

The Gryphon lifted up both its paws in surprise. ‘**What!** Never heard of uglifying!’ it exclaimed. ‘You know what to beautify is, I suppose?’

‘**Yes,**’ said Alice doubtfully: ‘it means -- to -- make -- anything -- prettier.’

‘**Well, then,**’ the Gryphon went on, ‘if you don’t know what to uglify is, you *are* a simpleton.’

「かびかびぶっかけ算」(安井泉訳)なんて聞いたことないわ。それってどんな学科なの？」とアリス。グリフォンは驚いて二本の前足を頭の上まで持ち上げて言う：「**なんと**、かびかびぶっかけ算を聞いたことがないって！（ところで）美化するって言葉なら知っているよね？」。「ええ」とアリスは自信なさそうに答える。「それってあのう、つまり、そのう、物事をきれいにするのですわね」「**よし、それならばじゃ**、もしあんたが（その反対の言葉）かびかびぶっかける、ということが分からなければあんたはアホということになるよ」。

‘What’は強い驚きを表す談話標識となっている。PODにもLDOCEにも間投詞としての独立用法の項目はないが、形容詞として驚きを表す用法があるのでその延長線上で理解できる。‘Yes’はここではやや弱い、控えめな同意となっている。2語から成る談話標識、‘Well, then’は2つの『アリス』物語に類出し、「よし分かった、ならばじゃ」という意味に落ち着く。

なお、ここに見られる ‘uglification’は ‘multiplication’（掛け算）のことに言及しているが、同時に ‘to beautify’の対立語 ‘to uglify’（現実には存在しないが）を引き合いに出してアリスの知識を試しているところである。言葉を自由自在にいじくるキャロルの姿がある。

この章の最後の辺りに次のような下りがある：

‘What was that like?’ said Alice.

‘Well, I can’t show it you myself,’ the Mock Turtle said: ‘I’m too stiff. And the Gryphon never learnt it.’ ‘Hadn’t time,’ said the Gryphon: ‘I went to the Classical master, **though**.

「それってどのようなものだったんですか?」「**そうだな**、自分ではここではやってみせられないな」とまがいウミガメが言う…「**その代わり**、古典の先生の所に通ったよ」。‘Well’は実情を言う前に一息入れる談話標識で、‘though’はここでは‘however’と同じ働きの談話標識である。

14. 第10章に見られる談話標識はすべてこれまで現れたものなので、1つだけ初めて言及するものがある。‘However’を含む段落を見てみることにする：

‘How the creatures order one about, and make one repeat lessons!’ thought Aliced; I might as well be at school at once.’ **However**, she got up, and began to repeat it, but her head was so full of the Lobster Quadrille,.....

談話標識としての‘However’を取り上げるのはここが初めてで、基本的には接続副詞として用いられ、この語に先行する部分と後続する部分との論理的意味との対比・対照を強調する機能を持つ。そして発展的に幅広く発話と発話をつなぐ談話標識として文頭、文中、ときに文尾でも用いられ、先行部分と‘however’を含む発話との対比や対照を強調する。

15. 第11章：‘Who Stole the Tarts?’に現れる談話標識は‘of course’が2回で、あとは‘by the way’, ‘Yes’, ‘Well’, ‘at any rate’, ‘Come’, ‘Really’がそれぞれ1回現れるのみである。

そこで初登場の‘by the way’と‘at any rate’について見ていくことにする：

The judge, **by the way**, was the King; and as he wore his crown over the wig, (look at the frontispiece if you want to see how he did it), he did not look at all comfortable, and it was certainly not becoming.

この裁判官は、**ところで**、王様でした。カツラの上に王冠を被っていたので（もし王様がどのような被り方をしていたか見たければ、口絵をご覧ください）とても窮屈そうで、それに確かに似合っていない感がありました、という下りである。‘by the way’をPODは「特に、脱線を導入する定型表現」と定義している。ここがピタリの個所となっている。LDOCEでは「(会話において新しい話題を導入するために用いられ) 付け加えるに(‘in addition’)」と語釈している。話し手がある話題について話しているときに言い忘れていたり、ふと思いついたりした無関係な話題に変更する際や、関連した補足的な話題を導入する際に用いられ、「**ところで、それはそうと、序ながら、因みに**」などの意を表す。話し手自身にとって重要な話題を、表面上はそれほど重要でないことを示唆するので、‘to change the topic....’などの直接的な表現を用いるよりも丁寧な響きを伴う。主に文頭に現れるが、ここに見られるように文中にも現れる。

裁判の場面で否認する、いや否認しない、のやり取りが交わされる個所がある：

'I didn't!' the March Hare interrupted in a great hurry. 'You did!' said the Hatter.

'I deny it!' said the March Hare. 'He denies it,' said the King: 'leave out that part.'

'Well, at any rate, the Dormouse said ---' the Hatter went on, ...

「わしは言っていない！」と三月ウサギは大慌てで遮った。「いや言った！」と帽子屋。「わしはそれを否定する！」と三月ウサギ。「三月ウサギは否定しているぞ。そこの部分は削除せよ」と王様。「それはそうと、いずれにせよ、ヤマネが言うには ---」と三月ウサギは続ける。最初の'Well'は直前の発話を受けて「それはそれでよしとして」と、一応の流れをここで止める機能を果たしている。'at any rate'をPODは'in either or any possible case, even if a stronger statement is doubtfully true, etc.'とやや長めの語釈をしている。LDOCEは'in any case; whatever happens'と定義し、'At any rate we can go out when it stops raining'という例を呈示している。延々と裁判の場面が続くのであるが、天竺ネズミが拍手喝采をすると、たちどころに取り押さえられることになる。そこで、

'Come, that finishes the guinea-pigs!' thought Alice. 'Now we shall get on better.'

「さて、これで天竺ネズミは片付いたぞ。これからは裁判がうまく進行するであろう」とアリスは考える。'Come'は安堵・満足の心的態度を表している。後半部分にある'Now'は「今からは」という字義通りの意味合いが含意されているように思われるが、一方では「さて」という談話標識にも取れそうで、微妙である。

この章で最後に取り上げるのは'Really'となる：

'Never mind!' said the King, with an air of great relief. 'Call the next witness.' And he added in an undertone, to the Queen, '**Really**, my dear, you must cross-examine the next witness. It quite makes my forehead ache!'

「心配しなくていいぞ！」と王様はほっとして言われました。「次なる証人を呼べ。そして低い声で女王様にこう付け加える。「**実を言う**と、お前、次なる証人はお前が反対尋問をせねばならぬぞ。わしは頭がずきずきしてきたのでね」と。'Really'は文字通り「実を言う」となる。PODは'in fact, in reality; positively, indeed, I assure you'と定義している。LDOCEには一項目として'used for showing slight displeasure'と説明している。王様はもう裁判に飽きがきているので、少々不快感を覚えているはずなので、ここがLDOCEの定義にピッタリ当てはまる。

16. 最終章、第12章：'Alice's Evidence'に現れる談話標識は'youth know'3回、'Why'3回、'Oh'2回、そして'of course', 'Well', 'in fact', 'after all', 'at any rate'がそれぞれ1回で、相関語句としての'First ...Lastly'が最後の場面に1回現れる。

冒頭の辺りに次のような下りがある：

'Oh, I beg your pardon!' she exclaimed in a tone of great dismay, and began picking them up again as quickly as she could, for the accident of the goldfish kept running in her head, ...

あとの説明にあるように自分の責任でひっくり返した金魚鉢の一件が脳裏にあり、法廷にいた陪審たちを自分のスカートの端でひっくり返してびっくりしているアリスの言なので「あら、御免なさい！」が適訳と思われる。明らかに「驚き」を表す談話標識となっている。「アッ、しまった」「おっと」といったニュアンスの日本語も充てていいかも知れない。

アリスが通常の背丈に戻っているのを見て、王様はまことにいい加減なこと言う：

'Rule Forty-two. *All persons more than a mile high to leave the court.*' Everybody looked at Alice. '*I'm not a mile high,*' said Alice. '*You are,*' said the King. '*Nearly two miles high,*' added the Queen.

'Well, I shan't go, **at any rate,**' said Alice: 'besides, that's not a regular rule: you invented it just now.'

「規則第42条。背丈1マイル以上の者は全員法廷を去るべし」。すると全員がアリスを見る。「私、1マイルはありませんわ」「いや、ある」と王様。「ほとんど2マイルね」と女王様が付け加える。「いいわ、いずれにせよ、私、出ないわ。それにその規則はたった今、でっちあげたやつだわ」とアリス。'Well' はアリスの明らかな開き直りを表している。'at any rate' は前章にも出てきており、「いずれにせよ、どっちにしても」の意となる。

手紙が誰に宛てられたものか否かが問題となる下りがある：

'Who is it directed to?' said one of the jurymen.

'It isn't directed at all,' said the White Rabbit; **in fact**, there's nothing written on the *outside*.

「誰宛てなのですか？」と陪審員の一人が尋ねる。「誰宛てでもありません。事実、表書きには何も書かれていません」とシロウサギが言う。ここにおける 'in fact' は順接で、先行する文の内容を強め、あるいは補足する機能を果たしている。POD では「特に、訂正を導入するのに使われる」という「逆接」の意しか定義していない。LDOCE は 'really, actually' と置き換えている。要するに文脈により、順接なのか逆接なのかを判断するよりほかに仕方はない。

謎の手紙の中身について王様が言う：

'If there's no meaning in it,' said the King, 'that saves a world of trouble, **you know**, as we needn't try to find any. And yet, I don't know,' he went on, spreading out the verses on his knee, and looking at them with one eye; 'I seem to see some meaning in them, **after all.**'

「もし意味がないなら、見つける必要がなくなるので、ほら、大いに手間が省けるというもの。それにしても分からないな」と王様は片膝に詩を広げ、片目でその詩を見て続ける。「結局のところ、何某かの意味はありそうだね」。'you know' は明らかに相手に同意を求める談話標識となっている。'after all' を POD は 'in spite of what has been said or done or expected' と語釈している ('after' の項で)。LDOCE は 'after all' を独立見出しとして取り上げ、'in spite of everything' と短めに定義している。要するに両者とも「結局のところ」に落ち着く。

この作品の最後、第12章はアリスが夢から覚め、現実の世界に戻ることになるが、お姉さんがアリスに代わって夢の中身を回想する素敵な地の文が時系列に続くことになる。普通なら、例えば、First(ly), second, third, ...lastly となるところであるが、意外にも最初('First')と最後('Lastly')だけに談話標識が使われている。4つの長い段落の中に夢の中身が凝縮されている。'second(ly), 'third(ly)'はなくとも、その呼吸で読み進むことが可能である。これまでの長い、長い話をわずかに正味2ページ弱にまとめる、キャロルの筆力は見事というほかない。

数々の夢の中での出来事がそれに対応する現実の世界に見事に置き換えられている。近代英語の見事な見本とも言える名文となっている。

注：

- 1) OALDによる定義は次のようになっている：(文法用語で) a word or phrase that organizes spoken language into different parts, for example 'Well...' or 'On the other hand...'
- 2) 英語談話標識用法辞典、ix
- 3) これら7つの語(句)についてPODは次のように説明している -- 'dear me': int. expressing surprise, distress, &c., 'indeed': expr. Incredulity, surprise, &c., 'there': int. drawing attention, 'come': (imperat. as interj.) now then (in encouragement), 'so': int. of approval &c., 'eh': int. expre. inquiry or surprise, or inviting assent. [north var. of AH, OH]
- 4) 英語談話表現辞典、三省堂、内田聖二、2009
- 5) 筑波大学名誉教授(日本ルイス・キャロル協会会長)安井泉氏

Textbooks, Reference Books and Dictionaries Consulted:

Alice's Adventures in Wonderland, Penguin Popular Classics, Penguin Books, 1994

Through the Looking Glass, Penguin Popular Classics, Penguin Books, 1994

Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, Penguin Classics (Centenary Edition), edited with an Introduction and Notes by Hugh Haughton, Penguin Books, 1998

Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass, The World Classics, by Roger Lancelyn Green, edited with an Introduction, Oxford University Press, 1982

The Annotated Alice, with an Introduction and Notes by Martin Gardner, Penguin Books, 1970

More Annotated Alice, by Martin Gardner, Random House, New York, 1990

Language and Lewis Carroll, by Robert D. Sutherland, Mouton, 1970

Elucidating Alice, A Textual Commentary on *Alice's Adventures in Wonderland*, Introduction and Annotations by Selwyn Goodacre, Evertype, Ireland, 2015

英語談話標識用法辞典、研究社、松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美、2015

英語談話表現辞典、三省堂、内田聖二、2009

The Pocket Oxford Dictionary (POD, 5th edition), Oxford University Press, Oxford, 1969

The Concise Oxford Dictionary (COD, 5th edition), Oxford University Press, Oxford, 1964

The Oxford English Dictionary (OED, 2nd edition), Oxford University Press, Oxford, 1989
Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE), Longman Group Limited, Bath, 1978
Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD, 8th edition), Oxford University Press, 2010